

# 第 152 回日耳鼻長崎県地方部会

## 学術講演会 プログラム抄録集



日時：平成 28 年 12 月 10 日（土）14 時 30 分～

場所：佐世保医師会館（佐世保市）

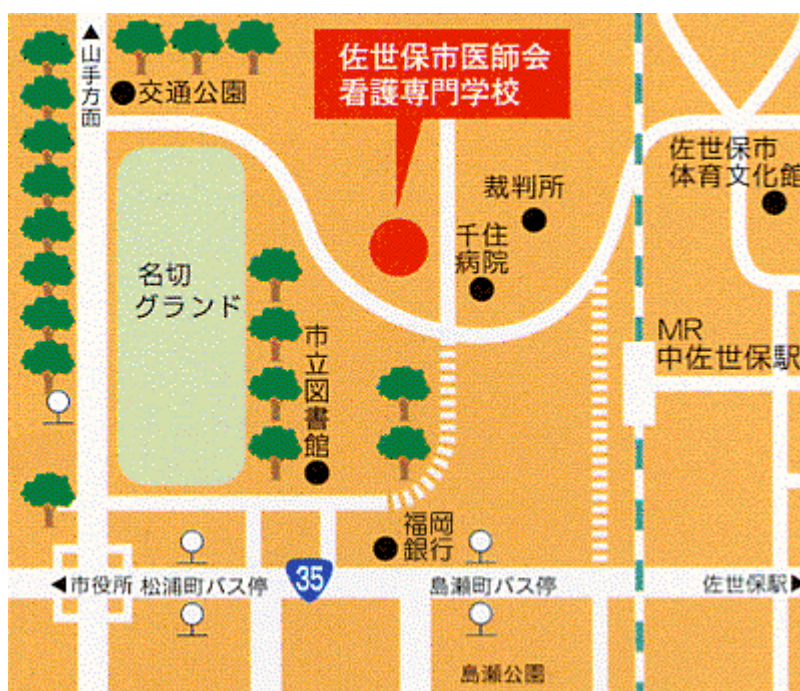


### 〈ご案内〉

- ◆ 会場は、佐世保医師会館（3階）の大講堂です。  
〒857-0801 佐世保市祇園町 257 番地 TEL0956-22-5900  
(JR 佐世保駅より徒歩 25 分、松浦鉄道中佐世保駅より徒歩で 7 分)
- ◆ 専門医の方は学術集会参加報告書(平成 28 年度用)をご提出下さい。

### 〈演者の方へ〉

- ◆ 一般演題の口演時間は 7 分以内、討論は 3 分以内です。スクリーンは 1 面でプレゼンテーションには Microsoft Office Power Point 2016 を使用します。Mac 使用の方は Windows ファイルに変換して、文字ずれ・文字化けなど無いことを確認してからフラッシュメモリーでご持参下さい。スライド枚数に制限はありません。



★会長挨拶 (14:30～14:35)

高橋晴雄 (長崎大)

第Ⅰ群 : (14:35～15:05)

座長 吉田晴郎 (長崎大)

1. 当科における Endoscopic modified medial maxillectomy 症例の検討

○久永将史・田中藤信・奥 竜太・加瀬敬一 (長崎医療センター)

2. 鼻出血を契機に発見されたムンプス後特発性血小板減少性紫斑病 (ITP) の  
1 例

○桂 資泰・梅木 寛 (嬉野医療センター)  
中村拓自・在津正文 (同 小児科)

3. 当院の突発性難聴に対する治療成績と今後の課題

○山口仁平・岩永 哲 (長崎みなとメディカル)  
山本昌和 (佐世保総合)  
吉見龍二 (長崎大)

第Ⅱ群 : (15:05～15:35)

座長 陣内進也 (長崎大)

4. サルモネラ菌が検出された深頸部膿瘍の 1 例

○高島寿美恵・安達朝幸・山本昌和・西 秀昭・藤山大祐 (佐世保総合)

5. 両側口蓋扁桃摘出術を実施した家族性地中海熱の 3 例

○小路永聡美・隈上秀高 (長崎原爆)  
安達朝幸 (佐世保総合)

6. VITOM を用いた口腔、咽頭手術の経験

○吉見龍二・渡邊 毅・陣内進也・金子賢一・高橋晴雄 (長崎大)

★同門会学術奨励賞受賞論文講演（15:35～15:55）

司会 重野浩一郎

2016年 渡邊 毅（長崎大）

演題名：Vocal-fold vibration of patients with Reinke's edema observed using high-speed digital imaging.

★長崎県耳鼻咽喉科病診連携研究会総会（15:55～16:25）

司会 長崎県耳鼻咽喉科病診連携会長 野田哲哉

- ・ 会計報告

長崎大学医局長 陣内進也

★連絡事項、その他

★閉会

★懇親会（18:30～20:00）

当日は補聴器相談医更新のための講習会終了後、長崎県地方部会の先生方を対象とした懇親会（無料）を同会場で予定しています。万障お繰り合わせの上、ぜひご出席ください。

## 1. 当科における Endoscopic modified medial maxillectomy 症例の検討

○久永将史・田中藤信・奥 竜太・加瀬敬一（長崎医療センター）

内視鏡下鼻内手術において Endoscopic modified medial maxillectomy (EMMM) は下鼻甲介や鼻涙管を温存し鼻腔形態を保ちつつ上顎洞への広い視野が確保できる手術方法である。2016年に当科で EMMM を行った再発性上顎洞ポリープ（13歳）、術後性上顎嚢胞（65歳、71歳、86歳）、上顎洞乳頭腫（69歳）の5症例について適応と限界を含めた有用性、術後経過などに関して検討し、若干の文献的考察を加えて報告する。

### 【参考文献】

吉川 衛、他：上顎洞含歯性嚢胞に対する Endoscopic modified medial maxillectomy の有用性. 耳鼻咽喉科展望 2013：56；59-64  
中山次久、他：術後性上顎嚢胞に対する Endoscopic modified medial maxillectomy の検討. 頭頸部外科 2014：24；45-49

## 2. 鼻出血を契機に発見されたムンプス後特発性血小板減少性紫斑病 (ITP) の 1 例

○桂 資泰・梅木 寛 (嬉野医療センター)  
中村拓自・在津正文 (同 小児科)

特発性血小板減少性紫斑病 (以下 ITP) は後天性の血小板減少症で、小児では 28 才に好発し、50~80%に発症 3 週間以内の先行感染の既往が認められとされる。麻疹や風疹などのウイルス感染症に合併することはよく知られているが、ムンプス罹患後の ITP の報告はまれである。また、一般に ITP は紫斑で発見されることが多く厚生省特定疾患の ITP 診断基準 (1990) でも「出血症状は紫斑が主で、歯肉出血、鼻出血、下血、血尿、月経過多などもみられる」とされ粘膜出血のみでの発症は比較的珍しい。

今回われわれは止血困難な鼻出血を契機に発見され重篤な貧血を呈したムンプス罹患後の ITP 症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

### 【参考文献】

増江道哉、長瀬朋子、山田美智子、他：粘膜出血のみで発症し、紫斑の認められなかった特発性血小板減少性紫斑病の 2 例. 小児科臨床 2002 : 55 ; 19-22

### 3. 当院の突発性難聴に対する治療成績と今後の課題

○山口仁平・岩永 哲（長崎みなとメディカル）  
山本昌和（佐世保総合）  
吉見龍二（長崎大）

突発性難聴は未だにその病態と治療法が確率していない疾患である。近年フィブリノゲン高値が聴力予後と関連することが報告されている。われわれは、2013年8月より選択的にフィブリノゲンを低下させるバトロキシピンを導入し、突発性難聴治療に使用している。3分の1近くが二次治療症例であり、バトロキシピンもしくはプロスタグランディン製剤を併用したステロイド治療を行っている。2013年8月～2016年8月にかけて治療を行った33例の治療成績について報告する。

#### 【参考文献】

Kanzaki S, Sakagami M, Hosoi H, et al: High fibrinogen in peripheral blood correlates with poorer hearing recovery in idiopathic sudden sensorineural hearing loss. PLoS One 9; e104680, 2014



#### 4. サルモネラ菌が検出された深頸部膿瘍の1例

○高島寿美恵・安達朝幸・山本昌和・西 秀昭・藤山大祐（佐世保総合）

症例は59歳男性、受診10日前から頸部痛を自覚し、左頸部の発赤腫脹を主訴に当科を紹介され受診した。深頸部膿瘍の診断で同日に切開排膿術を施行され術中に採取した検体からサルモネラ菌が検出された。頸部膿瘍の多くが口腔内常在菌や嫌気性菌を起炎菌として発症し、サルモネラ菌による頸部膿瘍形成は数例しか報告されていない。今回我々は深頸部膿瘍からサルモネラ菌が検出された稀な1例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。

#### 【参考文献】

内藤博之、他：Salmonella Enteritidis 腸管感染後に頸部膿瘍を形成した1例.  
感染症学雑誌 2006；80；271-274

## 5. 両側口蓋扁桃摘出術を実施した家族性地中海熱の3例

○小路永聡美・隈上秀高（長崎原爆）  
安達朝幸（佐世保総合）

家族性地中海熱（FMF: Familial Mediterranean Fever）は周期性発熱と漿膜炎を主徴とする常染色体劣性遺伝の自己炎症疾患であるが、扁桃炎を繰り返す症例も存在する。今回、口蓋扁桃摘出術（扁桃摘）を実施した FMF3 症例を経験した。術前に診断されていた 1 例は術後経過良好で、2 例は術後舌扁桃炎と鑑別を要する発熱に対しコルヒチンが有効で不完全型 FMF と診断された。扁桃摘に際し FMF を念頭に置く必要があると考えられた。

### 【参考文献】

國松淳和、他：外来における不明熱の原因疾患としての家族性地中海熱の重要性. 日本臨床免疫学会会誌 2016 : 39 ; 130-139  
右田清志：家族性地中海熱（FMF）. リウマチ科 2015 : 54 ; 137-142

## 6. VITOM を用いた口腔、咽頭手術の経験

○吉見龍二・渡邊 毅・陣内進也・金子賢一・高橋晴雄（長崎大）

VITOM (Video Telescopic Operating Microscope) は手術室でのセッティングが容易で先端を自由に動かすことが可能なカメラである。口腔外にカメラを固定し、いわゆる“外”視鏡として手術を行うことで、術野が拡大され鮮明にモニターに映し出される。そのため神経や血管処理などの操作が繊細に行うことができ、複数の医師が同時に手術操作を確認でき、また手技の指導が容易になる。映像として保存できるため後日手技の確認が可能である。さらに当科では医学生教育などの観点も含めて積極的に VITOM を使用するようになっている。

今回当科で経験した VITOM を用いた手術について報告する。

### 【参考文献】

多田靖宏、他：VITOM25 カメラシステムを用いた口蓋扁桃摘出術．耳鼻咽喉科展望 2013：56；339

同門会学術奨励賞受賞論文講演

渡邊 毅 (長崎大)

演題名 : Vocal-Fold Vibration of Patients with Reinke's Edema Observed Using High-Speed Digital Imaging.

Watanabe T, Kaneko K, Sakaguchi K, Takahashi H.

Department of Otolaryngology-Head and Neck Surgery, Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences, 1-7-1 Sakamoto, Nagasaki 852-8501, Japan

英文抄録 :

#### **Abstract**

**Objective:** We aimed to assess the vocal-fold vibration of patients with moderate-to-severe Reinke's edema using high-speed digital imaging (HSDI) and videostroboscopy and to confirm HSDI usefulness in examining the vocal folds with Reinke's edema.

**Methods:** We examined the vocal folds of seven patients (six severe and one moderate; six females and one male; aged 55–74 years; mean 64.7 years) with Reinke's edema using HSDI and videostroboscopy. The following characteristics were analyzed: glottic closure, mucosal-wave propagation, left–right asymmetry, phase shift, frequency difference, periodicity, and contact of the true vocal fold with the false vocal fold.

**Results:** HSDI revealed complete glottic closure, anterior–posterior phase shift, and obvious contact of at least one side of the edematous true vocal fold with the ipsilateral false vocal fold in all patients. Mucosal-wave propagation increased in six patients and decreased in one. Left–right asymmetry was observed in six patients. Left–right phase shifts and left–right frequency differences were observed in four and two patients, respectively. The vibration was periodic in four patients, quasi-periodic in three, and aperiodic in none. Anterior–posterior frequency differences were not observed for any patient. The vocal-fold vibration always synchronized with strobolights in two patients, while the vibration occasionally and never synchronized in two and three patients, respectively. In one patient whose vibration occasionally synchronized, videostroboscopy could not reveal the slight left–right frequency difference of the vibration.

**Conclusion:** It was often difficult to observe vocal-fold vibration correctly in patients with severe Reinke's edema using videostroboscopy. However, HSDI was useful for examining these patients. Our results suggest that HSDI can be very useful for examining the vocal folds of patients with severe Reinke's edema.

Auris Nasus Larynx. 2016; 43; 654-657

和文抄録：

ハイスピードデジタル画像を用いたポリープ様声帯例の声帯振動観察に関する研究

## 緒言

嗄声の診断において声帯振動の観察は必須である。また、強い嗄声を呈する。従来、声帯振動の観察には短い閃光(ストロボ光)を声帯振動の基本周波数(以下F0)より若干ずらして発光させ声帯振動のモンタージュ像を構築するストロボスコーピー(以下ストロボ)が用いられてきたが、ポリープ様声帯のように声帯振動が非周期的で音声からF0を抽出できない場合は観察が困難である。そのような場合はハイスピードデジタル画像(High-Speed Digital Imaging、以下HSDI)が有用と考える。本研究の目的は、HSDIとストロボを用いてポリープ様声帯例における声帯振動の観察を行い、HSDIの有用性を確認することである。

## 対象と方法

ポリープ様声帯7例(男性1名、女性6名、55-74歳、平均64.7歳)を対象とし、母音/e/発声時の声帯振動をHSDIとストロボを用いて観察し、(1)声門閉鎖、(2)粘膜波動、(3)対称性、(4)位相差、(5)周波数差、(6)周期性、(7)声帯と仮声帯の接触について比較した。

## 結果

HSDIによって、周期的または準周期的な振動、完全な声門閉鎖、前後の位相差、声帯と仮声帯の接触が全例で観察された。左右の非対称性は6例、左右の位相差および周波数差は4例でみられた。粘膜波動は6例で増大し、1例で減少していた。一方ストロボでは、浮腫が高度な4例で観察ができなかった。術後はHSDI、ストロボともに、周期的な振動とわずかな左右の非対称性が全例で観察された。

## 考察

浮腫が高度の場合、たとえ声帯振動が周期的でもストロボで観察できないことがあり、これは高度嗄声により **F0** を抽出できないためと考えられた。浮腫が高度なポリープ様声帯例において術前に **HSDI** を用いて声帯振動を観察することで、粘膜の粘弾性や粘膜余剰の状態などをイメージして手術に望むことが可能となり、**HSDI** は有用と思われた。